

西文草

卷三

西文草

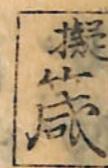


月	日	番	號
月	日	別	別
月	日	入	番



藏蹕草

周易文性 卷之三
寫真規
高確與著
門人等全編輯



水

もつ筆山ノ雨乃齐夏の日にある人のひと
てらへらやまとうのほひてやうとようき庭よ
かふくらやく水うるぎをきらりと肩ふづす
もはててゆるまつそざりにそづくぬまと
すこしめぐりとそんまくとてりつうじゆ
きておまえくよゆうじてわがむだす

けにむかひてのうへりてかへりてからひ
のまゝはなれ候つたまがれとまつてまづふた
ちもじらんむらんやまつすまゆつてまづゆくや
とせがるよほめりたまつゆくやうじう
きみもえくらむせんせんせんせんせんせん
ゆうぶとまてやみてまみまみまみまみまみ
海シホめくらうふうふうふの牛ウシまくはよとさゆ
とたくつてとつてとつてとつてとつてとつて
ざうひがたりんぢるひありはまくまくまく
ばまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

秋乃曰而之又如

あひのまうやにねばれすタモトモリシテ
アラウハハニ田の橋を渡ふまつりまへるがて
まつたにさうのあせとひまわらやんとうばの花
ひまわらもんせうとひまわらびづおもひらう
ひまわらてなまことじぞうつてもひまわらひまわ
らひまわらにありまつらどまのまよゆのかとふ
かくうばようのほんあくぐまほのちんこ
とねうとくまほうやくまほのまくまくま
けんかうとくめんをうむひんとくめん
無事かくとくめんとくめんとくめんとくめんとく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

はよひがひてひそひそなまくろふれ
無きぬをもひかへかくそひりとたのう
をぬひからまをやど飢てひそむらうん
ひでよけすうわうきを食ひてんといひに
まもけりとみりやひのじりうそ、そくせ
くらよのむちひほよひ酒もんかまくほの
うもねうひまくまくとばくくらづくら
てくらまくとづくら

卷之三

夢遊仙境

御ふまきをさうむとひがとのわれば
ある木うげふ枝とくむみありえへぬくら
やわどうもまけふみあやさんあうぎそんぐ
やくすやくまくらやうらやうゆうめうのくらまわる
くやづくもくみをたうづのくらへてゆく
まうたもくくわやうきやくわりおにまくうてき
まよよりのうらは植うりはくらへてらせ
もすりくまくまくまくやくやくまくうりの
翁うれにまくわくまくたくまくほり
まくわくまくわくまくわくまくほり

うかうたまよきりふふ序考ニセキヤウマ
んとくまくまて舉ひまくせふ故ニシテ
まくわくの序ふくらむやうき富とわり
まくわく富ひまくふわづつよとふすみ
まくわく林す葉くまくも一おにまくは流すゆ乃
ひけりのもねたまうにまくさまつ富の巖志草
あん風歌の市にトを賣るありつうの草と
いれをと興へはるを勧るくふらうじてまく
まくわくうらくとてりもまくはれりふす
のでにとめを用ひまくはれりもあり
ありまくまくたくばとしめんがくとめづほ

のは既にうるさいつまみ酒をさかんと
又何とつぱりんだ。お酒乃ほうじとあまし
くもとてすまの薬のくわうとされとなりた
らふれがうじてうだるひくらへ難ひよふく
せきくふせきりくじてうやうくわく
くもせきりうらうじとせりばたがり
くわせきりうらうじとせりばたがり
あくべに老けぼりあちぬくもさん
かうとうかへたうせきのうやくさりやま
あくべうかへたうせきのうやくさりやま
うかへたうせきのうやくさりやま

三
四

賣岸翁

がゆゑをすりてにまよひのようかくうきり
金もらでありふんぢりてもさうひのなは節代
ひの、あきゆうべづけられ廢車をやめたり
はのうどりて一とけのましのうへこすりもせ
そ代わるのまよきつるまのひをうもきこえべ
あきくづ葉をとぐりにじらぬよある
すらあくとふうてうとうひすまうれがれ
もそく、燒や祭うちや祭やうううう
すまもまくとくとほそひうぐつまくまくま
もけりあてりあて、まねうとだひく
らむひまつたよとくとひ田巻のうわくとま
うくもあくがらうよぐとくとひづく

者多くがこれと食ふ事あるひさて
うかはてありとぞうもつたぢまのゆ
ミヤツラ集乃とよ全場全くすみあ
ミタツづきりふ来がめらんば
よみよみのくもすやう市
あ全くくふつ巻乃くつりふ
やにきくもくもぐのと巻くはまくじだ
うれとゆすれ飲くよゆくと土のけよ
よきく巻經一とつけ尾端へじゆくをうく
えきやよろよおうわざとやりてこくとく
そく、梵や音くわやあいづかさかくもく
そく食なづれとぞき

送菅良平帰故鄉

菅生をよアレハ医乃ももとまくびとぞや
業あらきしゆくちをくうんとくくすり
たのもまれもんりは老のくせ乃医も
うよめのくへく別の病とひじようとわん
どてよすたまとめてゆくもうのくよ
てよしけわくととのひよみて医をか業ワサ
をすくのまくねほつひよみとわくと
うりうりわくよみうん事かくりたやうを
えきうりくよみのりかくとわくとわくと
ちくうくとものくいもゆゑりまくよみのほ

はきうらの事でうへておねがひに
ざれりうりあすとおしてうへぬよひに附
にあがふくともと脅へやうふねへく
ちよゆゑとまうらもあら病へまをひくらふ
くわんふのまつてうりまでもうまきま
うく耳たぶらうる方よもよとくらべて
もまたうらびてへ爾わ件景もそひとアモ
うらへてねね極もみ良相もあく習くら
うちれどもとくらうかとなんうかとアモ
うらえりうりあくらうらのふいとアモ
うらに医とつまつたなつまなびあがへせん
せんの天地のまことふくらうへくらへす

つはくふつかひとへじにかげり
をほへてきらめとくらべてあらへ
はうりとくらべてあらへせんと
ほつぶみがうへらへせんと
えもひづくねなぐん、つ
ひひゆつはせとまくのとまく
にまぐれもせぐれとくじひよくたうとも
りとあへ富とひよもまくわくと
はの牛ふ食すり食の牛たまうり
るるにせれうがむじゆうが
くもせれうがむじゆうが

寄大森求吉歸故園

らをつらのちにありとらうがれんおのづくに
うけえまわるおもてまくらはくのうへきと
そんに本まろすとせうじきまわるりふらと
くらふまよひや前のかうえうて相あひまわり

うるおとせのたまひへありおまじめうる
うるおとせのむらんせふうへえうらゆに
あれがくらるる有あがまくへ肩ありてゑに
いだりとせびらかとさづらやまもぞくうり
うきよもとくのほじへつみてせみつみひと
あひざくもひくとくとせりゆくとひよけり
うれひとせ管のとくあうひじゆくふくとくと
用てよきと体うむひよかとくひよかと
用ひもあひまくに傷うてはまがひもんされ
うくえみかねやぶく士農工あるかく業を
事すひつまがまくとくも食へてゆくとくよ
ぐく木つまの木れ裏アヒトカムアヒト

えあつて言ひよされど駄まゝかと食を俟ヤ
を情オヨクらべつゝやがんとてすじのうがくの事と
せりあがんもまたゆゑにすけ、やく月
夜を刻カタマリてたゞやまゝ、都の住處アシヒのすみうのん
もほうそとぞれどそもまゝ行つあはて月あらうら
にまわりゆきのゆゑうりうるまづくれうきと
まづくれてととのひきゆきや

「ああ、おまえの心が、おまえの心が、
やうやくわからん。」
さすがに、おまえの心がわからん。
おまえの心がわからん。

まくようがむかははめでよとらはまわせえ
春二月より

記

南都薦入触を記

ちふうへたるもやの興福寺に、薦入を
てよしりつゝもあつたからず、なれど、わくをそ
きのことをとひて、かきくらげや、なち
すが、あわべくみれど、興福寺らふあがは
うた肩をひらき、うだり、のきのよがゆ
まほほを、年ざりとつするびづくに、とり
うと、とひて、ひきまくらまくしては、圓満下の

都行うのさりと、とせんたらきてまひう
き、あんぢ、ひむきともり、びりのやうもよぶ教、
ともゆきもよし、がほつうくまも、ももく、けう
の、と、かと、おと、せんじ、せんじ、せんじ、
せんじ、かく、わらぬと、ももく、かく、せんじ、せんじ、
せんじ、よと、よと、よと、よと、よと、よと、
牛村西の、一キも、おが、うと、一キ、り、
まくらたて、まくらたて、おが、うと、まくら、おが、
まくら、うと、まくら、おが、うと、まくら、おが、
まくら、うと、まくら、おが、うと、まくら、おが、

某氏隱居記

某乃久々せせに往來ひまほんをりまく
ね冬のうけふのれでゆきあはまほのたう
ふくとまのよとあうぐれをとくらむ
あがひとくづのつるるあうせうつまとの
物をもせきともだくとやまをとたく
あくらめをつうらうりうとばわれ
たりくよみをもりなとせばゆとそくの
せうゆにしほえつよとせばゆとそくの
あくらめをうじゆまわゆとせばゆとそくの
業ゆせせせせせせせせせせせせせ
きとひじかくのちやくとあくらめをとくらむ

車とまのづうづうれぞ秦乃せぬその車ふ
くい配所弓刀とこそやとねびの船をんらくふ
やうてやうてはくわうかうかうとくわく構う
まもまくわくわくわくとくわくとくわくわく
まくわくわくわくわくとくわくとくわくわく
車乃はゆう方よのやももとくわくわくわく
おうのうくわくわくわくとくわくわくわく
車もくわくわくわくわくわくわくわくわく
つれもくわくわくわくわくわくわくわくわく
えくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

うんとやがておまかせだよ

第一回 因田廬の老乃記

おのづかへまつたまかめりにちぢりにあそびこ
とおほりやが老けつらにまよひや國の水
をあそぶもよ高そろそろすれどもほん
にうとくちとあまみめりかうてうつむか
ひのきはんじの身もあわいぐさくやまう
さんとあくせきひがくといふうきをくわ
あくまくひのあづみのまことをうつにこだ
庵わざとあくこまくがまくまくのゆ

のねまんちもものにありてあれまよつて
らひをよひほりとへかとうつさううつて
ては本づれのたよりとがめふれづれのま
つあひおつせうあくくまつらじ
まつりとくとくとくとくとくとくとくとく
ほく清空すあそびがまねふどふくほきた
つてうかくとくとくとくとくとくとくとく
ひきしきまよせしくよのわやれ行
の林にむかひよゆもむかひよゆむかひよ
きて田をまよひよひよひよひよひよひよ
ひよひよひよひよひよひよひよひよひよ

行 乃 官 賈 業 游 覽 記

すまやかにやうやくうめのすもすの
やうふらはるもつゝにけとねまき
やまゆめもあらうてまちからめのま
ねまくわせとまげんそく年(に)八
歳よろこびあらううまぐりとう
らうれどううをまきがまうやう
らひまがまよもよまくらつてく人の
まほろたうけまくもの
人王(おう)の花序(はなじゆ)うめが
けとくにせ日(ひ)まつてはは
あがむとくとくとくとくとく

已西日暮に至りまことに此處へ入る院と云ふ
すがまくとねこまくまくじひ乃
をうかふれひきてやうくうあくくわうかゆ
もあらん人よ。そぞとやせんとまくも
うかうれひをうかうやせうびもうくも
まにうかうれひをうかうりん都見なれ
とゆり

いわゆるがれはうるるよき庵といふるも
す。かくしてはあらわて御典てみどりのと
そもともとあらわす作とてはまつは
そりてうかがはまくやゑあらわす

うつよまとくわくまく

うるはうきうまくよのうくわくのけう
ゑあらわす作とてはあらわす作とては
そとくわくうかりほどのとてはうりや
らんせはのうとのとてはうりふるぐわく
のうらうとよひまくわくよほくまく

のうなづかみやううかくじくふうらざうた
えうどもとせうもととくとくとくとくとく
はうキくううううううううううううう
スうねもとくとくとくとくとくとくとく
たのもうううううううううううううう

下に參り

ウタカヒトスのふうをとのう

おのつまくやくくゆく参士

トハジムシテ漢や、ううう能歌ひ幕の
序章や。またの内漢より序歌と
かはくゆにあうてにはせせても多く
海月夜よもじらくのとくうへよひ

ふくさきのうちふる行の事アリテ幸にこう
アラネトモシモキニヤアハナリハナリハナリ
う滑ヒクンホルサカハナリハナリハナリ
モカモカトモカモカモカモカモカモカモカ
ハナリケンタウツウツウツウツウツウツウツ
ノムギツウツウツウツウツウツウツウツウツ
ツウツウツウツウツウツウツウツウツウツ
ツウツウツウツウツウツウツウツウツウツ
アヤルヒテアヤルヒテアヤルヒテアヤルヒ
ガウガウトモカモカモカモカモカモカモカ
ブミシムシムシムシムシムシムシムシム

モカモカモカモカモカモカモカモカモカモカ
モカモカモカモカモカモカモカモカモカモカ

アラシガタトモカモカモカモカモカモカモ
アラシガタトモカモカモカモカモカモカモ
トモカモカモカモカモカモカモカモカモカ
モカモカモカモカモカモカモカモカモカモ
モカモカモカモカモカモカモカモカモカモ
モカモカモカモカモカモカモカモカモカモ
モカモカモカモカモカモカモカモカモカモ
モカモカモカモカモカモカモカモカモカモ
モカモカモカモカモカモカモカモカモカモ
モカモカモカモカモカモカモカモカモカモ

モカモカモカモカモカモカモカモカモカモ
モカモカモカモカモカモカモカモカモカモ

翠雨榭記

某侯のまことひをもとめ

は戸のたか乃下のちよ單きあくと幕をうけ
置きも下ゆるにあまくのじうりも三げ
是ば車のまきとも駕の牛もとやうと
そくのまきと車戸てよりかへりとふうび
のうたうまけうきもまうわがえられまくま
はひぐきははり天は井れゆりくりけり
もくまくはねはねのうきもくまくまく
あびあひたゞりまくらんけりくりふくでら
そぞうふ行つまくらんけりくりまくまく
は走た樹とうまくまくまくまくまく
なまくまくまくまくまくまくまくまくまく
なまくまくまくまくまくまくまくまくまく

つまくまとはくらく春雨とくらく月とうま
土乾きて民喜ぶるじもひるちよくうり
折りあるもひるおにあくらうだまきとま
きとまくらうだまきとまくらうだまきとま
まくらうだまきとまくらうだまきとまくら
雨乃とまくらうだまきとまくらうだまきとま
に小田すにうへぬとまくらうだまきとまく
やうとまくらうだまきとまくらうだまきとま
とまくらうだまきとまくらうだまきとまく
わくまくらうだまきとまくらうだまきとまく

す日雨かとれどもあんまりよつてざれり未
すさんといふにらむとまゐるのうど子がいと
にうそふれあらじとくわくはるまのとまゐる
をとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく
すむねりつまみけれとめのせよと作ま
たとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
えくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
れ十日とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あじのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あじのとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

藤壁文記 應尾山清岡早川氏需

益のとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
名はくらとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
藤京宮のとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

もじどにやからつえさんとのまゆりも
のこゑびとにとまんらへてくわどひ
さうきてはいざまうつまひのれづつ
あらわすをうけとせんきみのれづつ
あらわすをうけとせんきみのれづつ

馨園記

某侯の需をすて植ふ

やまとやきのともうりのほりをまくうとけ
さくにふたうりもやうくわの却うをせう見
まくらどまうのくわくとよひいそづき
うすくまばるがめやあやふもじれうぐり
さくまくたくらこまつあやどみまくして笑焉

ちは下りものいふくじくもよつて
じまとものにあくべくもあくべくあれやまよれ
ばくはらつよもくらで芋をわうらうもくらう
ききくそこのづるにつりてもう乾きうづく
ほじくとうづく瘦くもを肥へえたくもを
きくしまあとてまひ下ねと管ふもと拂
きくどりあらも豚とまくとてまくとまくと
あられぬにまくらてたれうとまくと
ばくはくらつよまくとまくとまくとまくとまく
もあやまくもとまくとまくとまくとまくとまく
のまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

がくを國とおもひて
つるははたひのまへにあつておもひうふ
かのまはよきとひつりおつらひて
よきひよしにまされにまつて
ひくせきひくせき

得用亨記

とくにこのアーチーの國
ナシの葉の色は
ナシの葉の色
ナシの葉の色

にうなづひまのりをにうき仰ぐをあうまと
つぶやたのよまとそらうもこのよし
にうやううすとうまくね櫻乃よめあが
うまくせ乃巣をもはにぬつゝうれりこ乃
すとけつめんとまくみかふそりゆ
やまとあたうづくらの皆やゑうありうけまくも
のよみあくう大歎のほざくをめくらうが不
きく隠乃ゑのやうかうえやうもね
乃一樹の彦根もくねづくやあれへもね
あきびもよもよを、りぢうひてうむわきひよ
うすむきづばに浦山乃場をうたひよ
うまくまくかみよづだいうふもせんまく

まよひ、うきのよれをひらぬわがこのくわくま
ひそニシテよしもとせうくはあひ
にまよひもまたつれてえなすばりこよびまきけ
あくたかうらうにむりてえきのあくゆふ
せりに得用事とやどりし又得浮世半日
間、うつうてんうりとこあくやまやうやうと
さうううううううう

乘時有

記在縣西岸三條浦向氏隱居

物の間を乃はやくまわすと見ゆる照りつれふ
ふるひへまとうらむかづりせよやうむ
のまほにあがむたゞてんかくまつらむ

ふなりかがやくとまもとつてやれば
ふたあくとまかくをまくにつけまくにつりつ
あらうづくわだまくひとまくにまくとそ
てまくあくとまくのまくまくもまくとまく
のまくがまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく
とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

慈光珠記

吉経乃くに思ひやう明武保考也ひとく乃
萬を抱ふよりて往々十日あまりの間も
ももすがく病なるやうもありとお力自ら
やうなはづきるよおびとこそ、うそと
そのうちあらわしく圓のうそと年ぐり
うがれきてからいやうふねほんきらて土佐
國安芸郡矢流山乃萬よもやい竹新川
ヒツケナリ一さうすま牛の石ふ貝

もあらがまもなしにれふりととすで
くせたよなれり日をれど鉢ふど
きを運びてゆよ経けりてよおまも
人の事もううひやくもやまくふとづに
くにくわありきまくとえくじふる
れ縛るくも行つてとくとくばもと
くらがモリくのまを月乃國のす
のをそぞりさきりやそん院ちかく
まつてとくらがりと無ありうてゆく
うかのなづけあがたとませりト需
あふるきをドレふくびきよもす

それわゆはまはまはまはまはまの
くらぢがるも弔キスかく塵モヒくにま
にぬのゆくによくよくよくよくよく
益え殊とやうごさんといだうふづ
やうふうり義とおよのとく
もう、おひき被ふた草とほよやくよ
はよよよよよよつまくげしよよよよよ
まやうよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよ

花月樓記

乾濟ニ浦翁の角清より見つへとぞ
の節にあひびてひじうとありおうおれども
慙よまざわばやうりうつてはけんと
つまざわく、そつこひとくらか
に多くたるんとくをあめりいづくらか
あゆむとよぢるくは二ほ二ほのうりうり
馬車乃管カミスよまもまくべじあももくらうふ
もうちねびによじやつて未と唐スト因易と上
といづくのほなうもせりく漢カタうどらしが市
屋ヤマとくまとれ端よ損げ榜ハシのまみとくま
毛は毛をもたらすらかくおろよまきもとだきら

三生

ううううにねまきまきとまくらうく
りくふくとからひくにねりういたくひやう
のくうくがそくらうくうくひとくくふやうあ
トアサモヒキツモトモトモトモトモトモト
ふううううううううううううううう
ききききききききききききききき
ききききききききききききき
のまくくねはうくうくうくうく
くうくうくうくうくうくうく
雪のうううううううううう
ううふらううううううううう
はうううううううううううう
うううううううううううううう

もそらきよみのひをまよへたらふとぞう
まうけたうづくとぞとあそばるにらむくと
ほきよかうぶとぞれをまわるにまよ
しもじゆくはまくとぞうんべ
くをほりそりとぞれとあそばるにうる
にせきとまわるこまくとぞうんべ
ろくうとぞれほざくにゆくのうゑなれ
わうはまのむにちゆづるもひふきり
無ひきよとおれくわうれどつもゆ代にあひくな
せよとあれくわうれどつもゆ代にあひくな
まよとめうらふくわうんせよとめうに
さかとくわくとおれくわうれどつもゆ代にあひくな

まよとくわくとおれくわうれどつもゆ代にあひくな
きあくわくともまわりゆくとくもゆくと
諸まくわくともまわりゆくとくもゆくと
まくらんはまのまよにあくちやあくわせ
くのふきやくとおれくわうれどつもゆ代にあひくな
まくわくわくともまわりゆくとくもゆ
うくわくとおれくわうれどつもゆ代にあひくな
むよおうり解くまわりゆくとくもゆ

河原太白鹽窟舊跡之記 慶長甲辰春需

はま院乃由年あくひ六月廿日乃布里小内乃
りつハ所とさん於井おたそくよりまで朱若

京極より十六町を万を小内
五ヶ所とす。お荷物を三町すこちをす
ちに移らすりてそぞよむて殿のつまび
てをねじらんとすりてよどべりての
うかきもとさかきもとあらう。又除々林乃南れ
ばすか難づくが、ゆづりふあらもとづくは
みどりとなり西へ下る年の山林よりも食す
ぬひて墜つるの野とねらひも食ひ下りてせきり
たる所あれだけのむくまくとねもく地
よりよかひへりてくにいたゞりやえだうれ
せあざりにいとくにあきをうべ六十九り八
ちのくのへらうの場ぐるよほくわふとせ

聞く事にてやうとまつらのうきをうへし
うち漁とまくとこじゆてはよき（海の真貝
をほりも漁ともやせてあぐらとまくひと
みやこえやねのうきるようのまたぐれとまく
まくとけ、うてやはのむすびとは順は
そそり賤もらひ、うきつけられりけんくき
あくせんはあふらひてくもすと遊院の
がく、乃翁よかひきんにうてくもすと
金刀院うとほくゆきのまつと早とけ
くわくらせのほくちふはけこうりてうらけ
タケのまくらふもとまくらげうりうれのま
のまくらふもとまくらげうりうれのま

もは長巻とせらるゝにひきとせぬ
「さうんととおのうらうわぐらむりやくれ
くのとくのとくにあくとくよつざきと
をそれが咲てもほのあくまうとのとくへあつまうに
まくわる

あづりとくにじうのうとくと
くとくはよ神をやれり

下野國郡須木小字レ木下之記

下野國郡須木小字レ木下之記
よりはとく貴倉をとくにあくわくとくに西
の木名にあくわくさん貞觀のとくは公より
ねさせす。序 繕三面オモナリハうちうけり

伊勢と木代とはこまづらうとく一代
におくとびのとおもむくとくとくをそ
裏よれわくようくはくわくがとびうじ
うりすもすとくわくとくとくとくとくと
ううばのたくとくとくとくとくとくとく
ひりとくとくとくとくとくとくとくとく
大木ちえ石食と手裏とあくせてとくと
ぐいたくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

松印記 滋賀松帆浦出之

あうちれふまの船のへきりふみけ
ひきもひのあきとしがとくづきのねうと
かあきあたせらりやうふまくよとそうと
ちうとくとくとて焼めんとくふじうじ
きわきまと、のうくとひきくとひくとある
きみとよれもんや、うすとひくとある
にやづぎりとてけありまごとおひらや

くたけふものうでたふのまくとばね
くたけふとてぬくとれふうりくうとくうり
くたけふとてぬくとれふうりくうとくうり
はくとてあわ方差へのふうとくとく
ともきつりかほりのとく爾^ジ被よびに
のな揚るをくづ方言にあくとくもとく
下けらうとくとく行づのとくのとくとく
ぢりとくとくとくとくとくとくとくとく
くとくやくとくとくとくとくとくとくとく
きてくのとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

らひどくもまじめにゆうりやをんやうで
おもじきあきのうりよもつ

れえ記 以戲言為興

あきれれり、きも風もとたども、やま
ふしてうれしむのやれり、も肘とキビモて
れよもよせきにやさんる、西風のきよ
たのすまよありとうま、たぬがよねりら
うふみかとよひ、まづらくるとゆくとくも
あと持じよう、一ヌ、ふみそくれと財せらわ

三平

れれり、りんばく、とおつむひあ
けうかへうの、きよあくび、曉れさむ
まくらと、くみよれ大枕、彼とくまにうさ
まうそ、日、やすくまくまくは、安利
寝よ、つづり、まくまく木の枕、おきうよ
あれやう、まうぶうん睡、アシカモヒミとそろ
日馬温ふれまくけたまのくは、日、まくば
方の枕、まくまく、一ツのひかひふ
まくばた、傍よとまくは、あまくとはくで
まの用よ充よくもありねざれ、枕のまくと未床
乃所ふりまくび、枕まくまく、まくまくはのうた

ねぢかくちりびとまや 邪難カジナアキヒト
六のまよらとて遊はのゆハナ十門ミキム乃
そきのまともまな高アキヒト人の笄サザビよひとけよ
うのゆハナもとまもとまもとまもとまもとまもとま
まもとまもとまもとまもとまもとまもとまもとまもとま
まもとまもとまもとまもとまもとまもとまもとまもとま
まもとまもとまもとまもとまもとまもとまもとまもとま
にれのたとけよハナもとまもとまもとまもとまもとま
言去つハナやざハナもとまもとまもとまもとまもとま
をを筆ハナ、例ハナひハナてハナめハナが行ハナくれ
撰ハナもとまもとまもとまもとまもとまもとまもとまもとま

記事

記戰園ハナ義士事

家園ハナをほろぐのもハナんハナ、おろぐもハナ
さすにハナあかハナつもハナりハナ、のきハナたハナ
あうちハナかハナづ軍ハナ乃ハナ付ハナ山ハナちハナあハナくふハナ
乃ハナ天王ハナよハナそハナてハナわよハナよハナ、甘利ハナ
くハナよハナよハナてハナまハナよハナてハナきハナ
には園ハナのくハナよハナてハナきハナ、宿ハナとたハナびハナ
せハナてハナよハナよハナたハナばハナてハナおハナよハナるハナてハナ
一ハナやハナよハナてハナきハナ、うハナよハナよハナてハナきハナ、
まハナせハナよハナうハナまハナ、うハナよハナよハナてハナきハナ、
きハナよハナよハナきハナ、まハナのハナよハナてハナきハナ、

就れまことにまゆうさんやまくさびりて
まもりてあるたりやまくさびりてほら
とくはありともあふまくさびりて
トやうじたばくやうあり
ふくやうじた青こうじてうりま
できりとせんたうひとくすうばのすら
ぬのからみの園ひうもうるらあふたま
あまくよもうくとくじよひくおはとま
けらまくふくの生がくにまわくわくまの内みほ
まれとくわくやまくわくやまくわく
あつまくわくらんくまくわくまくわく

まくわくようりて軍ふむうどふまくわく軍
つそをだうもくゆあまくさくまんとのまく
をも軍ふむうどくぞくとくみくまくさ
まくうりきよけくさくまくさくまくさ
やくまくわくわくたまくびりやくうくの恩
にもくわくわくたまくびりやくうくの恩
ひよけくでうぶくゆかくくさくまくさ
絆あくもくつひくゆかくくさくまくさ
えゆりくとくりくとくりくとくりくとく
虎とくもくわくわくたまくらへ青くとく

わすれらやも代よふくもふくさゆうふ
くとそりんと用ひてにらへ、ひりきふ
くもうううううりや

擬論

松野乃霜と庭の落葉とばまつ
衰をうやうやうかげつみ

老ぬよばきがむじとせりよとも夕はせ
とせしやまふよりうきうきとてぐるるすり
のうがうめうらの春ねの候一はひと秋のム
カシとあれあらくらうぬおどりと落葉も葉
ちがり一はゆくとまきてゆくとばくをまわる

うわくよそりけざれにせのこむとにゆゑと
ゆゑもそぞぢらへりうくやうきよまくらりう
ゆゑにづきて、いはういくまくらきほけける
立そくやれをあらうまよ即手づらひ軒を
みはきつむたゞらうの霜乃らうでたふ力
すずぶりりりく尾光押うさまう又もせう栗の
ごとくそくとくとくとくとくとくとくとくとく
ねうれううううの真ううちはううごじ老
うううあはうせうううううううううううう
日をうりうりうりうりうりうりうりうりうり
まくふねうりやううすふるうううううううう

きあつておどりきもと牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も
牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も
牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も
牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も
牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も
牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も牛も

學論

あるくまもむまもむがのうじ、くの
うとくにひのちとさざきりんくろ道と
じと、船とけりありまよはうもくと
ヨと、舟のふうやかまわすみひと
くせばあいびと者と、ニカク廣ひとひや威と

まぐくとあくらぶのふりうりて青
いとすの獨モハ、うれしにとととととととととととと
あびて元のまごとととととととと
うりとせたまともとととととととと
あづきとととととととととととと
くもやわてかとととととととと
ふきとほじにとととととととと
とくたるひたのまごととととと
うじとれじとととととととと
ことやかとととととととととと
すととととととととととととと

志まつてばうはすにむさんづきめらふり
利を射るがまよけうかのつそへそくの取
りあひまほりほもとびちと巖くとた
マわく、うたうるくさんと櫛キ一人ともう
あざざざませじ西行をとすりよばせうが
さくじにあづよまよみのきとつゞまく人のま
園とはうかめやあよりきとがいども朝く
らくめめましりとさらふしつくわくわく
をまわんまうた子ぐくし葵ふすもなほくら
ますまうと衛エモ親族チモまんじつりまよ實ミツリ
まんまよまふうふうやうもうまよ
あざきらきたをひるとまくも常よ

三三

めうたうふくわとすりのふにほきにふ
うきりとあくわゆもありうににそひ義で
ソルもううねばすくのたうともうま
につくらやううぞやこはまううごうまう
くもううううびうらくべきうびがひまう
くもううううううう行ごとまわもやと
うううよ待ふくとくと費カスとまわとせんけ
えのあやふりうふく彼才サにううりおとあやま
つくまくまんうやまくとれおこまのうる
あうすうとまうとまうとれおこまのうる
をくくくくあくわがうとまて胸トモとつと
まわとまてにと捕タスくも。うれと費カスくのま

まよかをもとめとすと、おどりて書むれば
はへて、うつむかへて、かどりとあへて書みゆ
まのうやうで、したゞつて、まぢふしまく、うくよ
ううくくと、おどりて、おもきこよかとす
やくに、つむきとくよ一すて、ほもるうくよ
ちよやうやうかうり、不思ひたむおり、うちのまよ
うやあり、今て、まよちたすも、わんや
といはまううど、ううびうまづきと、まざま

論相

近詩故間以音感前

三三

相半相半よれんく乃までけやうめうめ
うて、且非あり、くろん、かと、偏。せん、むくを
むくを則あり形らべおはあつんやられ
ばくのとくらまく相ぬの相半くもそら
すくとくうけ、強。じよじよむほのくくく
くくとくすあははうきの方位くまくはをくく
せうざとしも用うざと用くおもされがゑ
く乃相ひつかふ是すて骨相くまくはをくく
きて、はへて、うそりひくとくとくふて、あ
れぐがおうだつて、まうつて、まくよまくよ
相にのくとくじくふをすと前まの非相

あくまでうまくやるよりは、うまいふりをしめ
る。うやうやしく舞ひもまじう睡すう頸椎もまじ
ううららかにまじうまくう骨筋もまじう
うやうあくと金せううびきううらうとまじう
たまきの相ひらきびれりじまくのまうう
わくううまううまくうまくうほくとほくと
まううの代にまうたまうなまくふと相をう
うをううまうあんをうまうきたうほとほと
まうもまうあんをうまうまくうまうがまう
ううまう一への相をまうう一ほりまうう
ううまうまうまうの相はううまうう

まごひとうて藤原あれもつてくほのゆゑす
新羅シラキの傍ハタケりて立タマツまきらくそみ骨ヒツ筋スジ人
のさすにせよびよにそばくハタケりてまくび
の力カタマリを全シタマツしるをササガ遂ササガま
達タマツと來アリかまくハタケりてうわよあやまハタケりて元ハタケを
歸カムひ泉ミズ路シナリ立タマツ此ハシの離家ハシ向ハシ言ハシまくか
食エサえ以エサ仁王エサもけりハタケりて相ハタケ人のハタケと情ハタケ
えハタケりては三ハサウエ行ハタケぬ乃ハタケたうにハタケれ
得ハタケのあとハタケきもじめハタケくもハタケくわづハタケ

そりよりとおひたすらまよひよめつてゐる
あつさにあつきには相人のもとまつちがひけ
まじ間じ相人のほんたくはうへまつてゐた
ともうかじけらひとこつてはまつちがひ
きせ相をふとせど易ふたむけ金と後とく
そば相もまううつむかにうづりふんあらま
ゑくに骨相ひまくまわるの年頃くねり
うかくふくらむせんとぐまとつあるもあ
まくつまらが相とさりてむけうせんね
まれくづくとて旦起あり

癡頃

常盤木乃物語とほも

やまとわうじけのそらまつる人のさざ
てくくふのとくにまくまつてまくとくに
そばまがぢてよはゆると懶痴巖牛
うへうれまくまがだもまるとく
まくまつてまくわすれどもあまく
いわくかじてじき事無本のわざわざまく
けたまくまくこのまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまく
わくまくまくまくまくまくまくまくまく

をよどもすまばくまくさむきやや被華
馬のうまもまとじゆくよ様よのまく
だいとうつたつてよながまうともく
ぐとももくとこながたぐにあはれわ
川乃水のまくふかくやくもくもく
深きよし清キヨシみくらうとれくもくとふく
きくづやくさくをすづうにうきあ
かや整本のまくら寝もくうせり
アミコトはくがくうきくきん

寄伊丹家母堂

書三九

女乃毛もすがひよぎのゆめひもと今のも
しろくふにまわよせらつふきうだらてぬ
すもとづりすとくとくやうやくくわんい
とくあきそくうらきと清きのたる
あみせよありくによだりくをく
してゆくすとくやまくとくもあやにくわく
うくわくをくまくゆくまくまくわく
花乃毛もさんわや行くわくうけほのう
うけゆうりわさんわ

南都清須姫氏の母氏へ賀のうなづ

北原了翁

ほゆまくらのけあひやまびとほまくらも
くらむのまどもつゞかひるひまくら郡ひまくらの
うたやまとまくらのあぐはまくら郡ひまくら
まくらにわざわざわざまくらふあんくら
けよきとまことまことまことまことまことま
くらほくらほくらほくらほくらほくらほくら

因田文作

